

令和5年度理解推進研修会

「子供の特性理解とちょっと困った行動への対応

～個に応じた指導に生かせる子供の見方～」

講師 臨床発達心理士・公認心理士・特別支援教育士

河村 智子 先生

参加者：品川区、目黒区、大田区小学校、中学校、幼稚園、保育園の教職員等 100 名
本校教職員 30 名

日時・場所：令和5年12月26日・本校体育館にて

「理解推進研修会」とは・・・

都立特別支援学校は「センター的機能」という役割を担っています。センター的機能とは特別支援学校はその専門性を生かし、地域の公立小学校、中学校、幼稚園、保育園などへの特別支援教育の推進、助言、サポートを行うということです。地域の学校というのは本校の場合は通学区域である品川区、目黒区、大田区ということになります。日常的には本校のコーディネーターが地域の学校や就学前施設に出向き、訪問相談で助言等のサポートや各区や各校の研修会の講師役を担っています。

今回の研修会は年に1回、支援部が主催して地域の学校の先生方向けに特別支援教育の理解推進を目的として開催しています。

<今回の研修会の概要>河村先生の資料からの抜粋

☆子供の困った行動とは・・・子供自身が困っている（ことからくる）行動のこと
大人が困らされている行動という捉え方ではない

☆「問題行動」と「行動問題」

○担任は「問題行動」（問題を有している行動そのもの）に注目しがちだが⇒

「行動問題」（そういう行動を引き起こして維持している問題や環境要因や行動の背景について）に注目することが重要

☆特別支援教育は「冰山モデル」で考える

冰山モデルとは：問題行動として見えているものは海面から見えている氷山の一角に過ぎないということ

⇒問題行動の「原因」「背景」等の問題の本質は海中に隠れている氷山の大部分の中にあるという考え方

○担任は問題行動やつまずきの「原因や背景」についてたくさんの仮説を立てることが
問題解決の鍵となる：理解力の問題？感覚や運動の問題？環境？障害特性？

体調や身体状況の影響なのか？・・・等々

☆子供の行動の見方：否定のWhy?から興味のWhy?へ

否定のWhy?	興味のWhy?
なんでできないの? なんでそんなことするの!	なぜそうしたか? 何につまずいているのか?

☆その子自身の本来の力を引き出すことが特別支援教育の醍醐味

=環境設定、支援の方法でポテンシャル（潜在能力）を引き出せるはず

○指導者はできて当たり前、できなくて当たり前と感じていいませんか?

<少しの工夫で子供の力を引き出した具体例>

学習の様子の変化	改善点
できるはずの計算問題を間違える→ 全く間違えずに、解く時間も早くなった。	プリントの設問数を 20 問→ 8 問へ減らした
紙すきの紙ちぎりができない→ 用途に応じた小さい紙片にちぎることができた	言葉かけで促した→ 製氷皿に入れるように伝えるとその大き さで紙ちぎりができた

<演習問題>参加者が研修の趣旨を踏まえて、問題行動の原因や背景についてのたくさんの仮説を立てることができました。

Q. 集会で真っ直ぐに立てずにふらふらして友達にちょっかいを出す子。気持ちがたるんでいるからでしょうか?

※問題行動：真っ直ぐに立てずにふらふらして友達にちょっかいを出す

○研修参加者の回答（仮説：問題行動の原因や背景）

A 1.集会の話の内容がわからない A 2.体幹が弱い

A 3.立つ位置がわからない A 4.注意散漫

A 5.友達と関わりたいから A 6.集会のルールや約束事が理解できていない 等

☆指導者の目的が「ちゃんとさせたい」になるとその枠からはみ出す子は悪者になる。「皆ができるからできた方がいい」ではなくて、子供の実態に合わせて、「将来、これができたら生活が豊かになる」ことを目的に、今の学びのひとつひとつが将来につながることを意識して指導する。子供たち全員が同じゴールでなくてよい

※今研修会を通して「子供ファースト」という視点が特別支援教育の生命線であることを再確認することができた思いです。

河村先生の講義の他、本校教員の教材展示も実施し、参加者の関心を集めました。河村先生、参加された皆さんに謝意を表すとともに、今回の学びを3学期にそれぞれの現場で生かしていただけることを願います。（「研修会概要」担当：塚本 健）

